戦争のあやまち

とけし小学校　六年　大川世愛

ドクン、ドクンと心臓が動く音、スーハー、スーハーと息をする音。これらは、今私たちが生きているからこそできることだ。生きているからこそ、友だちと家族とみんなと笑いあえる。時には泣いたり、ケンカしたり、その一つ一つ、一日一日がとても大切な時間だと思う。そんな幸せをこわしていいのか。

戦争は、その幸せや命をうばってしまうんだ。聞こえるのはばくだんの落ちる音、じゅうの音、そして、人が泣きさけぶ声。見えるのは家族が血を流して死んでいること、きれいな緑が燃えてゆくところ、小さな子どもたちが殺されたあと。感じるのはいたみと苦しみ。平和な日々は戦争ですぐに消えてゆく。当時の人々は、苦しくても悲しくても、きょうふの中でも、必死に生きようとしていた。

だけど、死んでしまった人々もいる。中には、集団自決で子どもを殺した母もいる。母

にとって子どもを殺すことは苦しかったことだろう。

私は戦争のことをもっと知りたいと思った。そしてちょうど、平和学習でチビチリガマの見学に行った。

あの悲げきを知るために。シムクガマでは、ハワイ人二人がアメリカ人をせっとくさせ、およそ千人もの人々の命が助かったのだ。

でもチビチリガマでは、あの集団自決がおこってしまった場所だ。その集団自決はほとんどが子どもたちだった。きっと母が子どもを守るために殺してしまったのだろう。だからチビチリガマでは助かった人は子どもの母が多かったのだ。

そんな生きることが奇せきというのに、私のおじいちゃんは生きのびてくれたのだった。

おじいちゃんは対馬丸に乗ろうとしたが、おじいちゃんの母、つまり私のひいおばあちゃんが「乗るな」と言った。たぶん死ぬときは一緒で死のうとしたのだろう。だけどあの

ままおじいちゃんが対馬れに乗っていたら、対馬れはしずんでおじいちゃんは生きてなかっただろう。だからひいおばあちゃんが「乗るな」と言ってくれなければ私の命もなかっただろう。ほんとうにおじいちゃんが生きてくれて私は良かったと思う。

もし戦争がなければもっと回りには友だちがいたかもしれない。もし戦争がなければも「平和な世界だったかもしれない。

私は、ぬちどうたからを心に残して世界の人々の平和、幸せ、命のためにも戦争はしないとちかいたいと思う。